俳諧歸源表註

中

中村俊定文庫
文庫 18
491
2

鉄舟文庫

自序

[illegible]原野は肥あるを求めて
曠[illegible]ある[illegible]農家の業を用ゐる時
[illegible]俗[illegible]を[illegible]んと
勞し自然を[illegible]て[illegible]
[illegible]の智[illegible]鉄山史[illegible]信友[illegible]
[illegible]

あるときつらつゝけふ彼なる尼うゑ人信濃守はを
のゝ名を借りて清水の用心棒同宿うゑ人答て
いとくんをあるはせてゆきてふにたゝかひ
きゝあるゝ侍をうれをうふつゝん物を嫌おを好し
居をなしは和歌あれて一筆ある分をゝ言を
ほてたなのむをおもゝあるゝ物を癒ゝ一色て
うむとのをうあるせゝきをゝはそ猫世侍ゝ
ものあるかゝ尼うゑ人お松家菊を祈とゝ兎祈て
かゝをゝを刹那ゝわれす寅時のゝ格別をゝ

せゝ屋をゝ祈松家の時跡をれと兎て又怎ふく
おとゝし松時家ほ道をゝ此名ゝゝ此ゝ
時きほゝ杖をなゝゝ此ゝ信濃の国名ひとゝ
祈をゝ名ゝ此ゝ信濃の国名ひとゝ
を遊ゝを費の茅屋ゝかけてゝゝ絶ひゝ
ゝ祈ほを問ゝゝん和猫地山川乃家高此風の白川の
筆松高ゝ名ゝを祈つけ鈴腰ゝゝ名ゝ言の服お
花のゝ聖此ゝ此ゝ侍ゝ那智熊野山の
問ゝきゝ伊勢此国ゝ二柴菊の名ゝ竜神代ゝ

[illegible]の方をもとめ給へ神枝おもふて神海宗
治一つ松の枝を傳ひ傳ひて見るまもなくもとく
らるれて償はのつゝ使ふこと[illegible]てを決し勝負を東
叔を[illegible]して[illegible]をもとめらるるに千日や中の二日
[illegible]詳なるおらを[illegible]を借りつゝ夷老和尚
松斎庵を請ずるの秘[illegible]の稲[illegible]の[illegible]の
穂[illegible]れらるるなり 俳諧[illegible]中[illegible]出る
[illegible]と云深[illegible]の[illegible][illegible]と[illegible]
相[illegible]を[illegible]して許されし[illegible]の[illegible]を[illegible]

中賜る松斎老人略[illegible]老人[illegible]あつめて一書を
按せらるる僕おもふる信牛の何友の[illegible]なるべし 俳[illegible]方の
り雪のり記る諸邦の[illegible]古哲[illegible]をあやとし
老人のことを[illegible]荷[illegible]として一集となさるるに[illegible]拾
[illegible]なる人[illegible]らるる[illegible]稲[illegible]
[illegible]乃[illegible]を載て[illegible]同門[illegible]
[illegible]風[illegible]を[illegible]
[illegible]餞[illegible]
[illegible]

悔むのあまりにあるものうらやすらへ夜すがら寝て暮るる
あんをあらためんとて撰吹を春のあらふ樽しのぶさとの川
せきもりはめのうの御ゝ中まれにあなきたん
ゝ今をうつしはんをうつしをきてをうつしをいとしのきたる
所の新屋　島原呼
ふるさとをうつしてをうつしをうつしの志きるるを
いまあらゝしくをうつしふるを義しつめをみんてをうつめぬ

安永第二癸巳

秋臺亭宝暦述

枕表紙

徒四寸四分横六寸四分紙数八十八枚首尾ゑ
白紙を加わ標題枕表紙となる表紙浅色
緑色にのも　増山井かゝもを合巻ゑせしもの也

芭蕉翁真蹟書入　六百八十八處文筆の長短さはゝ〳〵あり
同　真蹟下紙　其用おれところ物一重也
同　真蹟朱書入　下紙乃横挟又さ乃ゝを屋て百七十七枚
一巻の真蹟書入　八處
墨消　七處
芭蕉翁表中るせ〳〵年数ゝを乃ゝ元禄七すり
安永二年ゑ迄て八十載を歴文字鮮明也

枕表紙傳来

芭蕉翁　元禄七年秋九月病る應して江州膳所曲翠士へ
杖をひき道をゆく人かなしむ絲のくさ　伊賀上野の二王堂に一巻也
後の病て夢はかゝる野をかけ巡る　旅中の作
古芳　伊陽上野風士　亀毛　古芳　長子　也菊　伊賀の寺　古芳老人の
さふミの集作者
有屋はて今美州新宮大光寺和尚風雅の醉居士と蘭蕙
して雉子坊也蓼洛花舍孤庵のしてハ居士と鐘門の粥をわら
一碗の茶もとらず　爲　明月　東武今
古芳　松尾庵主

たとひきせ一巻ハお稟祿ゆを訪つゝ志ら雉坊の孫の
冥助のかふひて祿ゆをうり松尾庵のつゆひゆきしてとせ
ゆの夏ひき醉居士鳥醉居士祿師若うむひて秋くハゆつるけもと
やさ世を流祿師若うの秋ふ屋こまをもふひのとせ門ア行せ

斗墨古信光ともゝ在　躍の夜の夏　多位るふきつきとゝ布もて
ゆく流し　樂るかきハ川ハ流つ一やゝ翁乃ゆ入たるひ名ところハ
ひ形夏やとりたまひときくゝ乃やちるハ必やとり門勇翁象ほを
かき越乃ちゝもはを殺てふつゝの末信中松代佐埋ふゝきゝぬ
松尾庵一巻をゝく送夏まハもぬハ使を殺て送るきゝのふきもく
月毎十二日ハ先生ゝかゝりて一巻ゝ香花をさけ孫句一巻のふけハ
羅旅牡丹くゝひとゝ殺ゝ　ゝとゝおゝ雙忌の今日ハ秋毫亭
雲ゝいとせちゝ乃夏ゝ清　遠儀ゝ換てゝきとあ一ゝきつゝ忌ゝ居
かゝ乗ゝ　禮ゝ正ゝ在ゝ殺ゝ　ゝ形夏

芭蕉忌之辞

そもそも元禄の翁臨終に杖拠乃夢を見たてまつりしより
芭蕉東をふたとせ八十年桃李門に在て花實のふる例世に
芳しくまれなる事ゝ叶日文臺に向て一句の発句を吟くさを信仰
杖代守氏下秋亳亭其朝道を主て庵坊に摂齋して受ふ
ふと年ごろ叶ひふつきの未坊を待ねて真羽の山深まやふを
筆写をそこ乃餘也ゆるとそ免つく深ひ越の門孫に信義を
見てを芳を越を写信いつまを坊七つふふ古深さしを
めてい遊伝より一書を見せむ山きや祖翁常に枕と
枕志氣と談して教を訓詁ゝ多ふ乃ゝ東奥
雅花坊より松家庵（附屋敷）のふ乃長物ハて道ゝ和氏
随候の達も遇つゝ形ふ多ゝ先師鳥酔居士雅子に
こもとをあとい（ゝもゆふちを深くひめ置き多ゝ雅に病ふ

かちふ乃老裏乃んふそくや滅炊いり形ふ人乃多ゝ
翁の志に遺ひをんふとおそ也ゝ庵坊の松均ひ師の
もし先伝来ふをとを先風雅の因ふ俺に賜ふ坊
そのつゝ形ゝ志ゝ素に後を倍しつゝ志ゝ侍ふ
こ流はしにふひ阿ゝきてこ神を多ゝ社中に
人ゝ遇仰遇すふく蕉忌乃多元侍むふとを
其明志ゝ庵に多ゝ元侍むふとを
志きんゝをを人ゝ形ゝを遇ふ

そせ杖忌や
きく里形

松家庵
鳥明

答杉間詔

祖翁羽領はかきの文の挑表紙の一書奥州松島大先達光和尚
俗ひ松ふさとハ伊賀乃國の生にて七十九老人の仏葛うゆ
ゆり風雅ハ鳥居士と申兄の信友雅号坊也蒙くよ子おと
志ゝ尾坊松翁の杖をひく幸ひ松家と和尚と挑表の報ハ
年ゝ家々ゆけ出とはゝ文を投して訪ふの文てゝ志ゝ尾ゝ
多居士を伴き事ふさとハ神のおとゝ松家庵の英私乃切成て
屋苔を勤（きの思と申ゆ是ゝ第話して松ゝ流ひのはまゝ和尚
答信ていなく祖翁切書まさ〳〵終さ迄ふ一書を松家庵ゝ
ゆゝんとさふ家ん久〳〵生就い鳥居士ゝやくゝせちゝ申是〳〵を
ふ死なゝていと詩ゝ多ゝ居士ハ立〳〵まゝ進ゝ何ゝんん
志ゝ尾坊ゝ襟ゝして ゆゝふ庵〳〵や志ゝ尾坊首再伴ねんして
待ふ多ん是生ゝを知ゝ志ゝ尾ゝ多ゝ志ゝ尾ゝ多ゝ彩ゝ何て後ゆ

俳徒やゝかゆはときこゆはふとふ乱の南 おもひやふゝ風孫ゝ
忘前はゝ〳〵てや志ゝ尾伴の方冊を遊伽ゝ庵ゝ唐ゝ〳〵
系保をかきまゝ信中の友乃志ゝ形ふ松ゝ〳〵形きをお東
とや石ゝをつゝて山かゝやき形珠を愉ていふふ志ゝ尾坊か
風保ふとはゝ媚て彩區ゝ佳音をはゝゝ宣ふゝ乃日を物〳〵
月を紅て伝徒流ゝ入て沼友を坊ふ人〳〵めていゝ志ゝ曼ゝち
ゝ志おふ〳〵松代を昭音ゝ月紫をかきてやゝ志ゝ乱ゝ寺て
いゝん松家庵はゝ多ゝき一書をゝ多ゝふを余の襟ゝかき
ゝゝをおの〳〵 賺の注を陽ゝ〳〵ふゝ志ゝ〳〵ゝ〳〵ふ
そふゝ徒さきハ松ゝふと何ゝゝ〳〵ゝふ珠のひゝゝ叶地ゝ扶先を公せ
信中の沼友の義庵とゝ〳〵ゝの如在の神ゝ倒の一書を奥ゝ多ゝ志ゝ尾
たゝふゝひとゝ〳〵ゝの如在の神ゝ倒の一書を奥ゝ多ゝ志ゝ尾
さきゝ松きゝと乱て床上ゝゝゝゝ安〳〵三年をおの〳〵
おゝゝゝ松きゝゝ乱ゝ誓首且歎〳〵一つ倣ひゝ一章をかゝゝ捧て
祢逸通和セゝとゝきたゝ多ゝ志ゝ尾坊ゝ風保ゝ幸ひふ

去る年拾南風をうけふること後舟漕ぎ出さんとするふうたを吹ぬしの風雅の厚情盃て吹るはふをいさて壁を志つて
玉を好夢覚て ひとり 誰の筵ちん や僕たと
もせ秋忘るおもふ 後地しはふの中る不二を一枕山の素八翁さ
をて飛一とやさ迄名ゆ 生ハハたと
富嶽るむりひむくもしをふの効いを 欲一て一るをつくるいるを
志原 賜てそこの法楽る侍ふ 芭蕉忘やはくと富士つくく
名吟往昔翁山水の法を 後河の水数富士をやす秋の
家枕上 関東原の旅庵 枕表紙をはくとせ迄
咨を足や嗟ををを

時立庵百明

翁遠 絵帳のうちの人くみをくを見て翁を見て
まくくく人るまるひ多もおふくハ木の素ふふ岳るうもを名ん
翁遠 教を後をふ絵れさは ふふ中る西風の一をち
山乃真 ふふうを、法乃のくふうたをおをひて八蒼海る
みつかの室を築むをして道る漂ふうたを人ハ成たとかあく
してなや形くをふむいつ友秋毫を人ハをくあれミおく
人と屋をを術さ一る芭蕉忘をいとむの日を旅行家る
ゆふさを枕表紙とふつき屋迄 翁の遠書を後ふふ日
一流のめいふくたをる色とを流ふ戸るゆをまを
ふこをて後遠いをむうの ををふ形るう

寒を兼るふを
むしりれつる形

徐板庵
楚川

とせ秋霧風雅のさゝれしをかゝることせまほしくさきり
つちかゝの労いとはふき身よりも貨利の急を安うぬゆゝ
間をはてゝ籟地新春秋よりはてゝ孤つゝ孤をとむ
爲のこゝをふんまちふかんふつ或十二日を京輩のはゝふき
日まてゝ毎道のこのかゝふれを吹きもせちに
こつゝ西掃はふとはなさやうゝ帝をあくゝはゝふ孤賀を
まちはつて秋さあふゝ公羽のゝ孤をいきゝ孤一書
らてんの抽ゝ孤てさゝをきしときさし さのはゝくむゝ
志爲をふゝをりはふを抽を正ゝ第をのおもひふゝ一集の
しをひふんとをはゝつく社中おのゝ時ゝ迎ふふ孤

現在やはをてよゝくゝ孤

日ゝ伺一里

麥語

芭蕉忌

を我をふ松もをふゝのちを冬極　志ゝ俺

秋乃はゝらよゝ新乃俳こ孤　其明

深き秋を鳥鼠はけふ嵐し　楚川

をを松ちをや潮月ふゝ迷去　爲氾

につゝは秋志ふ人のいふむ孤　眠虹

ひゝゝたもゝの孤志不超を　窗湖

何しに家の細い或みちうきむま　此路
松を境乃かつさて蜂ふふ　振雨
彼岡くら抱き居子のうつ形支　自来
て乾日眠る夏ひ〻利し　五烟
水めさこ家て闘雞巷の道とん　踏習
ゆをうむし乃捲簾を歩　映鷺
晴支秋のうきき〻乾ふりて　戸芦
きほり鼓乃音のこそされ　風絲
ひり意を〻ぬ〻てはきんひろも菊　其雲

うき或身はそふふ狭ぬかて布　斗涼
蓋長ふきりの家家ふ鬼乃月　又玄
さ屋ての秋を風ぬ〻つ　砂珪
鯛あこやは糸もちり支人さ家　雪浦
生ふつき〻乾　紙農おりしき　竹翠
咲乃花ちり原寒て き日の歩屋　研石
乃ふ抜ふく乃ぬを勢さあひ　中和
春三月支ぬ目ぬ留るうちる　義草
小抜乃かゝ美のふとさ後　左禁

椿くぬぎ仮乃皇居は重なりし　坐雪
紅鼓あえをぬ谷せ庵室　卜円
かゑとち識悔いなてそ気ふふ　禹川
きりぎすちさてあるるのくま　南鳥
杜宇田植せ多ぬ多あるりよて　曲城
老竜乃兼をさてて通ひ　左文
ホはるるふつ三つふ秋せをの能　笛丈
あ分一世もあ多時る　風馬
萩せ声離ふんと時おくる　左咲

保ときのちりしるたのむ秋　翠路
月ふる乱陽ふはあふ八女形り　一瞬
門せもさ陽農ひる子ふふふ　執筆
二ウ
ゑけーゑ八ちせ道れもあれ　李井
も川風乃山ゑ迷歌もられて　麦語
翠篇屏風うかふ人せをふふ　一鳥
いつきり乃世を橋もいつて　五馬
おもも世て変乃縁のとめ　斗南
ふや乃しの改や言ゑせる　百竹

人も見ぬ垣根の花を吉咲て　花卿
美濃乃菜を買乃儀ひきゆく　伏竜
れくきをまもつ武しふ新つき　如貫
えあ新川くき咲し　盤石
いさ祇時鶏村雪まちてく　蘆石
はらくものゆ通秋はるる　野曉
花を縋ふ人乃ち流れいふん　路風
噪見ぬく役のきふをふ風　百味
ふ夫陸日中乃雲を翁い通て　其明

三

ふ北をもん　牡丹くつま　ちく尾
夏寒支四十年れを老とそ　鳥光
新弾乃ゑくを比叡山を　楚川
何新くのかさ鶏くをもち　窗湖
ひふ枝孫ふ茶さ新しま　眠転
結機の吉をそ忘ふつもくを　振百
にくくと今乃をそをををの形　此路
雲をふ形著蕉乃ふしかして　五垣
月ふ小野を打もれ不暮　自来

雪ちらす高ゐ屋せにかすかなる　映鷺
春ぬくあしの生ふる水に　踏習
ちるを惜む月の興せ　琵琶ひく　李井
醉泣きふす友のかゝる袖　庁芦
三ウ
くゝ葉やけはさめぬ垣ひくく　風絲
九条殿ゆく乃宮みそぎかな　其雲
ゆく男衾の上ゑ　ちらすき　砂陸
病眼のくやふ節乃かゝるめ　文玄
伝ふつる江飛ふ乃蚶満る　竹翠

一燈ふく〻ふ欲のもふさ　雪浦
身のゝ〻をくとゝ武たふ声不の飛る　中和
津寺ゝ占ゝ法ゝ中を責む　研石
遠ゝ野ゝ桜ゝ紙田乃音こゑ　百竹
けふ生もみちいつ里ふ　一鳥
稀人の氣色も秋ゝ月俤ひ　斗凉
小隅乃新多ゝ文ぬと　義艸
貴家ゝ行ちもてゝ来て　左嘯
ゝ飛乃巡る　何神乃庭　坐雪

至につゝみ持ちふる鉢いふりきり　卜円
ひとりぬるむをこゝろ後れき見ふ　岡川
似もつり男百ゝかこてふしものらゝ　南鳥
列々椿花をかきてちれ　曲城
きゝ見るるるぬふ皆を焚く風　左文
つゝ至つふゝくふ竹山もア　笛丈
綾瓶戸午時石ゝ日の陽て　風馬
佐保川つりものゆかしき　左咲
木竹投るつ至面出ゝ高しゝ　翠路

とらゝ主人乃縄ふゝ　月　斗南
拓馬竹時青異風のちふん　五馬
子ふ志つゝ加くりさ乃ほゝ　一驟
傾城を成ゝ家ゝ志のゝせて　百和
あしゝゝゝ穂ゝ乃ふ立　花卿
ゝ形ゝ男世を縫橋のらほゝや　伏亀
茅もて第乃をゝらふはゝ　如貢
紀しふを疲ふ馬もいふきて　盤水
いつこゝゝ寿り乃むしゝゝて　蘖石

夢かとも紫の香のほめくりはひ　野曉
袁乃やぬき　袖甘不こ香ひ　路風
ふ乃花　鶯る末　峰ちめやうに　麦語
ゆ　ゆ　そ　ち　ふ　ぬ　乃　ら　ま　か　く　き　執筆

蓬莱、字さねねて興り

四時

芭蕉翁

ふ　ま　ま　ま　ま　花　乃　ふ　形　ふ　月　ま　ル

保　と　ま　ま　ま　春　ち　ぬ　る　ま　硯　ま　こ　、

ぬ　す　ま　て　ま　春　ま　や　ま　ま　や　る　ま　ま　ま　、

ま　ま　ほ　し　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ま　ま　ま

秋風やうつ木乃らつ弦たゝん　去来

かさ持ぬ緒の除たゝきやふの月　丈艸

きゝうゝ勢相持をゝるや釜乃声　其角

庵農扶もみ〜かくふりぬ年こつ　嵐雪

ふ日ゐも師走八日乃さむ寒し　枳風

門の春はふ人さへ毛宝形雪　嵐蘭

馬ちふ茅もう是巻の月ふ　曲翠

保乃戸ちゝ中やてりふ　尚白

うちこふを小豆も市乃浦走の角　正秀

夜寒哉ゆ来や保ゝ武も　木節

新蕨ゝて出き八小春乃ゝ気の角　李由

ゐち出ふ秋持ゆ屋や風ふ流し　允兆

梅ふ来ゝをの〜梅持白ゝの形　路通

明ゝや赤穂の浦くゝいゝ月ふゝ　許六

花持のきかゝえゝの花めつ〜や　荷兮

板乃系の雪ふ流ゝ板持鶏　文考

ちゝふや麻苅わゝの孫乃風　越人

白のゝ文宿も月見ふちきり引　可良

ゆく秋を敷ものの線のうらにかゝる　乙州
きりたちてはらはれぬる秋の空　多那
ぬせ馬の鼓つゝ不要　第一把　史邦
広急の声を別るいりの角　木導
松明の山ぬる時　秋の行　野水
ぬるゝとなるいく枚目初しくき　荊口
塀ぬしの世界見る所化の雲　木因
ふきゆくや田はたの紙衣　惟然
保とりきて時〳〵見るの面ふる　利牛

とゝりはきまはりつゝ或る枇杷花ぬん　洒堂
いかもの乃鶴を見て居る在の角　孤屋
かゝぬく家もを面白や秋の月　壁坡
きゝ川を中人のあきんゝ秋の〳〵地　枇傳
かゝるゝ也　秋ゆ更〳〵け　凉莵
杜宇　時や　きつゝ苔乃とう　露川
あふさゝや　世のさきの乃ま道　智月
ゐのゝ〳〵乃田夫る荒き紅葉の形　乙由
くゐきる　夏山椿ふゝきり　枇居

山ちゝ世をむつゝ武梅植ふ　猿雖

くら金や宗乃家そゝ墓ちいも　卓袋

冬梅乃ひゝ月ちゝや烏帽子声　ち芳

おゝひれも永ゝ世一集ハまゝ

祖翁乃鄕禮ふもそ古哲結

一夕をつきて参ふ

元禄二年卯月廿三日

仙遊之翁仙

風流ハ乃もしゝ先や奥州田植ゝ　芭蕉

霞金子を打てつゝ乃ゝを外　等躬

打せ武てひふ孫の石や垂ゝん　曾良

籬ハ鮒乃蕊ゝいゝを形り　蕉

一茎ゝてゝゝる菖ふゝ川柳　躬

雇ゝ屋根ゝく村そ秋ふ乾　良

ウ

絲乃如かつきゝ伸る菜を扱て　蕉
世を捨のおとゝをむしきゝの　躬
有時爲ぼかも夢はいとぬるん　良
樟乃小枝ゝ恋をゝゝゝ　蕉
うらゝゝゝゝ気ゝの名ゝにく　躬
霜始ゝ山やゝ紅葉おもみ　良
漂蓋を宋を送る筆ゝまて　蕉
秋をゝ宗身ゝくゝものゝゝ　躬
始くゝ秋乃始つき破る鹿比角　良

ナ

時の情仏乃注ぬヒゝ月　蕉
い流ゝ始いのりを苔ゝ籠居て　躬
か形一支ゝ不ゝ恋つゝくいとゆゝ　良
やゝゝゝ乃尾ゝをゝゝ年やむゝん　蕉
せゝり保乱ゝ寺清ゝつめゝゝ　躬
ゝ秋ひゝゝ宗紅ひゝゝゝの時ゝて　良
をのゝ武士のゝゝたもゝやと　蕉
筆ゝ始ゝのゆゝ恋乃よにはゝ　躬
ゝゝめゝ稿ゝゝゝ各ゝゝ　良

手はらはらとかきて机をたしいまし　蕉
何百くさとなのめなる七夕　躬
住うへふる宿のはらはら月を見て　良
為あらむ六条うかみ　蕉
切ちきれ板ふちは撰のこ　躬
をゝ山ゆくゝ農戸にくるゝ　良
ちる花しきやゆるるを宮くふるゝ　蕉
教生石乃ちゑたゝ　躬
花遠き馬ゝ遊りを引て　良

酒乃ゆをひの古色ふ春風　蕉
六十の怪おそ人ぢむ月ふき　躬
磬地紙をふ家ゝ小袖かさぬる　良

芭蕉　十二
等躬　十二
良　十二

みちの松くの一巻大きも例乃
ゑおきと形もふゝ

花ちるまのしづこと風百まくれて
つゐにうせ給ふ三十余載はるとおもへ
世人乃生涯ともものさはがしつゝ
とゝ一夢ふ乾百一

鳥醉居士

とゝゆゝも夢世ちのゝちの小嬢ふ
うのさ形ゝ尺八さえて暮ふきり
小原女農そ枯つょはちゝ初あ
なのゝ戸ふもとゝ浦て手ち入口の南

然中むり志みゝ
戸へふちるゝ

和歌乃旅くせゝとゝ志ゝ秋竜亭ゝ
宗祇をゝ友とちのこゝ筆を
もち原ふ乃り徳ゝれゝて残さ
いきゝふなゝて経験におのゝ
かきをつゝけるもむ

其朋

志くまゝ式やそとゝ尾上ゝ風ゝ吹く
うつゝゝうゝか志ち祇乃時志ふ　眠虹
鷲巣の縫ち乃独骨ゝ行ゝ絲ゝ　烏光
ゆゝ式ゝ乃ゝ志ゝ　ゝ流ゝくふりき志子　此路

板ちふ所の月は有明にて　楚川

ちつ〻ふ居さい夢乃白一番　蹄風

少女はあはれ衣うちはらて羽をむ　ちゝ庵

佐運はゝ形をゆゝら覚　麦語

暮ちゝ義加藤乃青ゝ俊ちゝふ　富湖

むちゝ乃色の暮にちゝふ　李井

枕加はゝ行けちゝる目のさ先　虹

軍人乗りぬゝ李ゝ乗り　明月

風はい弧之佐山ふちゝりて　蹄

二

紅葉つ日ゝり蓬生は月　光

旅宝既歳乃ひと秋を明させん　風

緒多元乃橋はなのふと世の中　川

花ふ百おもひ舟のゝもゆふし　語

つき形成新婦春秋おゝむ　庵

帰鴈をり夜乃秋は暮なり　井

もとを忘はふ義林ちつふる　湖

かきふり糸のゝをめふ笈日記　明

月は山もとゝる俳世秋乃遠　虹

たゞ一重や馬と立てかふ格の戸は　光
そゝのふうり仕市日せてき　蹄
ぬゝ前子乃ち紙るものハふり鬼　川
左迂ゝ重ち仕いち利出ふ　風
くゝ武ゝ時ゝ紙の憂ゝ身を責て　尾
揚屋ふかたふ夢の浮た　語
ち乃の燈灯深乃月ゝくるひ時　湖
栗四くちるて遠為ゝ　井
東人もの仕ゝき乃潔ゝ　紅

ち乃つ武ふうた打　三絃　明
ふゝくゝと為のゝ多ふいとにき　光
塵ふ軒　塵乃も雀　鴨ふ　蹄
多ゝ花見つ里も豊弱て為り　湖
禁かゝとゝいくゝを春めく　執筆

春

梅ノ花くまもなふこゝろをちりゆ　志ゝ庵

むめ咲て山家ゝ多きくらふ　富湖

ノせミやまも寂吟すふ梅の色　烏光

雪ぬゝくるふ〳〵免ゝ車の南　其明

曙や梅の古里不余ゝ水き　麥語

藪ゝ多ゝ咲ゝ古木のゆゝふ　眠紅

ゝ梅や寺をたして備ゝ　僧一鳥

ゝふ寂てゝかに見ゝ釈の梅　自来

ゝゝゝゝゝ仏ゝ釈ゝゝゝゝ　五烟

ゝゝゝゝゝ見ゝゝ数実ゝ梅ゝ色　里枕

ゝゝゝゝゝゝゝ香ゝ数ゝ武ゝ免ゝ花　安倍竹芳ゝ

香をれゝ地梅ゝゆゝ扶ゝ水　振白

ゝめゝゝふゝまゝゝゝゝゝゝ　路風

梅巷花ちふゝきゝゝゝ外　此路

上人の庵とはるとそとをめぐるふるまひをとふる

梅咲て接ものの法師日ふる雨かな　楚川

寄るやいつの屠蘇人ぬけ酒　眠虹

くくひもそや春さめの新る風ひるる　此路

もきやひるる鶯き男なのるかな　商湖

寄るを堂れくくる新の時をいる　楚川

立久永寺のそれ書れ堂れ立こ京　女花由

くれ山寺ひ世ふる風ふそれ書ひ　其丈

寄るる稲ちる庫裏のひくきのひ　蘆石

声貧くる見ふる寄るふつの松利　麥語

をりき男に數寄農帰るきり　其明

梅時花咲きるめうそさら

稼ちるやちる利松ひ植てのふ　同

柳く百日紅をこの花るふ新　此路

ちふやや柳の戦くくは庇　斗南

けをやや庭ぬやふ武の新くり　烏光

庵厨ひ夜ふくくきちいてぬきり　其明

川をひやをもひ屋に菊ひ夜　巨圓

七日善光寺へ詣でて

なのはなやとり見もなをぬきあさて　たふ尾

人のはれとおし多の乳喜光寺　鳥光

古道や松に立つ乳ゆかしみ　窗湖

ちりつもるおもふい浪をふ萬この寺　白穎

いちまもや月はふ乳乃節る萬　たふ尾

きはちをやとちりつ向ても八重かさむ　其明

ほの芽をやふまるあらん紙ろ　同

おふ波乳をふりむふ人をものとえん　至蓮

朧月ふ我冬山ぬけぬる義の面　李井

はるひ子をふやは大波ぬ紙ろ　玉渕

庭中や見を松農おほを月　楚川

波乃松遠しみ田ぬ眺月　此路

のこ乳を接桐ぬ木のもと春ふ男　田城

をふぬをもの阿ふきいをふ　中和

むつ我乃ま来ふてきたるふのろ乳へ
石谷ふ溪の水凝ふのふるひくふて
紅をとうくを松のゆきをまちえ
はふ

うちかさ乃ふほを春ふ乳　其明

灰さうな春の小雪はつゆ　　麦流
道ばたやはるひ白き風ゆ　　風馬
出代りをかさふ乾のなまふ雪　　此路
やぬいまりの石の鼓うちきこゆ　　素鈴
見まはる京連もゆゆ屋面代田　　麦流
種おろを乾かき老のこしぶ　　路山
をつまやひふれ清流る大摸
を思一株沙椿樹
れ風ややさを和ぶまれ涅槃像　　其明

三絃くさて小菜ひ居ひんぶ　　路習
を乾るまの沼毛ぶまてふときの糸　　眠虹
春雨や沓声のうをまるれ声　　自来
てふ内免や軒まの一原仲のうを　　橋由
き刈谷のちの免れ墨の南　　志ふ尾
猿啼て橋乃このめ乃ちふ独きり　　此路
花椿家つく行ふぬもとふ　　富湖
つを支敲て垣をの無芦のむ流ふ　　岷子
田に寄り南の石れ滑の形　　義仲

蛙ふくや竹の戸かをむゆる　芦芦

荒小田よ蛙乃独ふるかな　律和

蝶とぶや金ぶ白へふちしもるき　烏光

蝶翁てしまくゆきの園とふるまり　夢邑

蝶乃出て山ちる風つ吹くるる　女を吹

蝶出て花乃高さむ垣独の角　孤有

古るや干飯よふつむ高ぬ声　振百

一集ともよひぬ春ふまれて春ふ　風條

のくアル鮎よわ鮎のちるらわと男

ちる魚をさくひ男泡をきゆる　笛丈

ふ魚や船こ乃ふ（よつまくい）　竹翠

泡乃一や海苦れるまふなまの愛　此路

ゆかきよのきらふ新れ芦縫ふ　島川

陽炎のふ川やひときと小田ち　花田

かきらふやみ海ってなるつて髪　和掬

糸ゆふや伽藍の軒れるき男　芦芦

長きりやぬきてはき百乃義　楚川

春れ雨や枝のひきを木も日ふみを　其明

世の中や春の暮ふる男山　春流

春の雨野路はつゝひしをり　春井

かゝるやうの俤ふゝの花　路習

曉や深山つゝしの蕾ゆく　五川

そよ風はいつゝ深せみちの　雲和

春のかゝ勢を海を奪れそふゝ　竹翠

春の風竈をゝひ光ぬゝきゆく　五馬

そふの舟つゝいとをふる蕾　楚川

ゆくゝ人見をつゝし蕾くさ　女　桃面

垣をゝひ流れ初めぬ蕾のそゝ　其朋

雪踏り集編ふゝとゆゆ

東武より帰りつゝかゝて習中れ

友ふゝをゝくるおもも婦

蕾のとゝ遊のゝゝ時をゝいつまし　梧庵

ち堀つらやちゝ木の柳つゝし　眠虹

ふ蔵や風のふゝ　温泉の臭　恵洲

埴ちの山名と流農ゝ蔵　南鳥

をゝ流世ちんをひく麻表　ちふ庵

麻ぬくむ焼世の松れひと木ふ　曲　滅

親兄子兄小松が瀧の音　烏光
はつあを蔦やひろの蕨のみどり哉　此路
雀子が咲かくまでのふぬる〳〵ぶ　眠虹
くつくしや蘇の〳〵をまの一ぶ　其明
木がらしの見送ふきたぶ　玉峨
なのあ山鄙やきくる雲雀の暮を啼　烏光
菓のあるやうきしあをあき風うぬく　楚川
あるが菓の吹まハ暮ふ日数ぶ　京尾
の一ふ磨ふふ孔のこ孔海の上　孤有

秋ふかきやうに孔三日ぶもこの花　白来
孔ちくやなる閉ふ孔ふ孔ふ孔　白竹
成出乃吹　鶯ふ　なのふむ〳〵ぶ　其明
菓かきや離ふあ孔ふ孔乃風　左嘯
沙搭桶の綜も陰き志ひの孔　芭由
ものなしや続ふふ撫ふ　左吹
ぬ一孔ふ孔ふ孔の中孔ふ孔きふ　此路
木の咲る遠山の富士を見ぬる
去のもるる種のきくとふむ
芭ちふ一ふ〳〵孔き〳〵孔ふ南　麥邑

花の色や世界もみな育れる　一鳥

にぶ〳〵と秋笑ふ梅の鼓かな　緑風

なのふ人をたちたゝふ佐久良ゆ　眠虹

ぬえかきゆゑ焼んなく高梅　巳仲

蜜ちふ花の郭山のこゑ乃ふ　映鷺

俳の色ちてのゑ孔きりめゆ　嵐湖

花ちり積進ふ八ちり　李井

ふを出て色めわ秋の道　楚川

みのかゝるゐちきりゑ孔ゆ也　烏光

秋中友ひつゝ　ををふ

ゑを人ゑ梅ふ　つをたゝふ也　其明

かゑをつゝゆきを日信ゑ花も咲　安語

みを世乃花ゑ　市朝皇居ゑ信ゑ　あををおうて

色孔ゑ　康成　寒きむゝ　ゆ　寺庵

咲乃ふゝをゑ又九ゆ阪をのゑ

師廟をふゑつゝ　しゝおゑゐゝ

白ゑ孝ゑて　薛　舞の志つゝ身ゑ

ちをを乃花のゑ　ゑを一鳥乃

ゆもきを　ふを

山陵ゑせゑて　梅乃ちゝ孔ふ　同

山ぬふのをゝゆ篠乃嵐の音　眠柯
ちるむのきも山吹もくもはふくも　左嘴
ゆく人や濃山かきる岩ちめて　孤右
山中や蘇見ふ人を見て通ふ　烏光
り春や備をききて旅もとり　惠徹

夏

はてせ名て降るはしあふたとゝぶ　楚川
ち流もゝへや枚の度むく人ちゝろ　麥語
何降ま成袷をきまハ紅ゝの南　ちゝ尾
かさ通てもめさ新ゝ光のあ成陽ゝ　拙西
袷ちゝきや翌ハもゝ降ま文衣　其明

おもひあつ乃抜や保ゝきを　ちふ尾
杜宇數聲啼初月　路習
中原農事始つゝ霍公鳥　李井
蜀魂何ゝ苦　眠虹
杜鵑啼過雲乃入りか南　風馬
不如歸去ふ〳〵曉の聲高し　此路
鸕鷀影冬枯農家ふ〳〵ー鳴　左文
ふゝ帰去ふ〳〵を啼ま竟　其明
ほゝきを待秋末世の多也　麥語

かくまちつふ秋月ゝをおう
一ちゝたゝきや卯の花をふゝ月　同
ほゝく秋やゆふ夜きふ相乃老　左咲
傳山ほゝ見遥そ山ふ飛　路風
そつ風や月の冴て
秋杉ゆゝ方紅吉れ阿しのふ　ちふ尾
悼楚川母
露きやたきふふきの挽歌　其明
ふ武ゝに改をいゝふ声やしきり　眠虹

宝暦眠江おくれ
まてる送るゝ高るゝ
こゝろ

おくるゝとも
よつくろる

みゝう秋乃ふき義のつゆも哉　楚川

るゝや四月八日乃格ゝ乃色　冥川

かやうゝ門の左食をりつゝ　古文

ものゝふや高おゝ一夢陳乃華　鳥光

眠きりや藪ゝ惰生の高ゝ青　麥洲

蝙蝠ゝ打明いさゝ山のまゝ京　曲城

ふゝふゝ見やぬき田ゝむゝ長ゝつ　南鳥

市中や屋根の小仲ゝ蕾乃　卜囚

花ゝ乃数乃ぬ蕾や野の接き　楚川

ゝそゝて風ゝもよゝ至武牡丹のゝ　白竹

巡禮ゝ乃ゝ山ゝを引ゝくゝかきつゝく　惺露

ゝ乃ゝち乃形ゝ兜のゝひゝり秋乃軒　竹翠

ゝ武仲ゝゝ山ゝ乃形ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　眠虹

蕾ゝ乃をゝちゝゝ乃ゝ風ゝ乃ゝ乃ゝ　花由

小ゝ乃ゝゝ義ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　其明

薔乃花ゝ恠刑峠形ゝ蕾ゝ乃形　麥邑

灣浮を田乃仲ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　禹川

岩角ゝ庵の子姫ゝ所ゝ一のふ　其明
休の子や數をのそきハ鶴ゝ乱　竹翠
ゆ戸ゆ出ゝ里も墨田のまゝの那　李井
かんこゝろ忘嘯ゝつとめゝ　眠虹
垣ゝ葛庵まゝもゝ鶏ゝく　李逸
山ゝこゝや山田ゝくねゝものさゝき　此路
ゝ孫や磯ゝゝゝゝゝ羽ぬきゝ　同
物つゝゝゝおのゝゝ星ゝゝゝゝゝ　眠虹
ゝゝ物ゝ魚ゝゝゝゝゝゝゝゝ　其明

かゝゝ子ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雪　雪浦
潦葛蒲かゝゝしゝゝゝゝゝゝゝ　鳥光
白ゝ豆　懸ゝゝゝゝゝゝゝゝ　此路
湯ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　眠虹
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　蒼布
家月やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　梦川
ゝゝ湯の羽ゝゝゝゝゝゝゝゝ　看石
蘖やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　李逸
田ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　花由

かーはくも馬のたてがみ桂女の形　其明

袁むーの形袁田るつふ月見せん　和風

田仲袁て田乃牡丹乃やそ〻ふ　下田

昨暮やゝ赤ちゃゝ多るもの青　鳥光

みて白ゆかせても風のさりひぶ　其明

いゝあんひむ形もふ身は雷鳴声　眠紅

蝉時て蝉のけりあて木の空かふ　曲城

せゝ鳴声六月もきふ竹の一多り形　鳥光

蝉ひを考青乃き我を揚ふの月　其明

青苔十日乃昼を蝉ゆ空かくや
ちつ行袁る伊乃ひとからふ子くは

夜北月橋虫乃伊乃き　同

ゆふ多ちや陣流ふ大戸くち　世重

ひふ不や日乃いらゝ鶏赤き　志ゞ尾

軍泊ひさゝ乃花ゆ志くゝ形　鳥光

軍暮て世かほ昼　牛乃鞍　昼形

世新乃咲きり山ゆ考ゝ川　を形

暑日やゝ乃袁やゝれゝ屁　楚川

竹つまゆ井の三きり乃ゝくふき　孤有

磯の底やあさちくひてあかるむ海

俳聖て軒下の名月　篁

山姥のたのしの小歯原は清水かな　自来

松の木戸清水の上は風のかるる　曲城

雲の峰四阿ちくゆきつる男　鳥光

さくさや椎もとあるく大ひくひ　此路

むら雨や蓮の上てふらくきあとく　眠虹

加茂より七条北信濃家　其明

川をひとをもてあるもらちの板の秋　同

ちら庵

上三十三終